

岩手県野田村の支援・交流活動報告（2015年8月22日）

チーム・オール弘前一行が弘前を出発したのは12時45分と、いつもよりだいぶ遅い出発であった。そのおかげか遅刻者はゼロで無事に出発することができた。

今回は学生が7名、市民ボランティアが13名、および私の計21名。この度の我々のミッションは「野田まつりへの参加」であった。

例年はねぶた運行が一大ミッションとなっているが、今年は諸事情により無しになった。今回は野田まつりの一参加者として、「野田村の方々と一緒にまつりを楽しむ」ということを目標として掲げ、行きのバスの中にてメンバー全員でそれを確認しあった。



この日の弘前を含めた北東北一帯の天気は雨で、野田村の天気予報も例外なく雨であった。雨天による野田まつりのスケジュール変更が予想されたので、行きのバスでは学生および教員事務局が、野田村観光協会等のTwitterを頻繁にチェックした。そのおかげもあって、スケジュール変更を確認できた。主な変更点は「演目はすべて体育館の中でおこなわれる」、「予定より1時間ほど早く終了する」であった。したがって、野田村を出発する時間を1時間早めることを、ボランティア開始前にメンバー全員に伝え

ることができた。

まつり会場に到着してからは、帰りの時間まで自由行動とした。何度も野田村に通っているメンバーは主体的な行動にすぐ移せた。しかし、今回が初めてボランティアに参加した学生が複数名いたので、そこは学生事務局がうまく対応してくれた。野田村の案内や、ボランティアにおける現地のキーパーソンの紹介などをしてくれた。初参加の学生にとって、到着後いきなり自由行動だと戸惑うことは多いと予想できるなか、学生事務局の行動は素晴らしかったと思う。

今年の野田まつりのメインゲストは伊藤多喜雄氏。彼はロック調ソーラン節の生みの親であり、野田村に毎年通い続け、子ども達にソーラン節の指導をされている。その伊藤氏が指導した野田村の子ども達のソーラン節は圧巻だった。



「津波を耐えたこの体育館。支援物資であふれかえったこの体育館。今ここで、野田村の子ども達がソーラン節を踊ります。」

司会者のこの言葉を聞いて思わず涙がこぼれた。

ソーラン節は漁村の民謡。漁村でもある野田村。野田村の多くの子ども達は漁業と密接な関わりがある。漁村の子ども達のソーラン節は、今まで見てきたソーラン節とは何かが違う感じがした。そして、野田村の子ども達は大津波による被災を経験し、多くの悲しみを乗り越えようとしている。ボランティアで来ている立場であったが、子ども達の演技に勇気もらった気がする。

メンバー各々が野田村の方々と楽しく交流できたことに加え、今回はメンバー内で交流ができたことも大きかったのではないかと思う。

野田村の方々による物販で、塩焼きそばなどを買い込み、メンバーのみんなで食べながら多くのことを語り合った。普段お互いがしている仕事や勉強のこと、今までの野田村ボランティアの感想など。

私が特に興味深く感じた話題に、「学生事務局OBOGの存在」が挙げられる。卒業後も野田村やボラセンを気にかけてくれているOBOG。その存在は市民ボランティアの方々にとっても大きなもので、普段のボランティア時でもよく話題に挙がってくるらしい。

一度、OBOGについて学祭等で触れてみてはどうかと学生事務局に提案させていただいた。「ボラセンの活動が今の仕事にどう活かしているか」、「今の野田村やボラセンに対する思い」など。それらのOBOGの声は私も関心があるし、野田村や市民ボランティアの方々や、多くの学生達も関心を持つだろう。

野田村の方々にそのような発信をしていくのも、1つのボランティアかもしれない。

震災から4年以上が経ち、ボランティアの在り方も大きく変化してきている。今後のボラセンの活動を発展させていくためにも、今が転換期なのかもしれない。今回のボランティアはそんなことも感じさせてくれた。

【担当：COC推進室 野口拓郎】